

社会福祉学会 News letter

第23号 2022年3月25日発行 長崎国際大学社会福祉学会（代表・脇野 幸太郎）

長崎県佐世保市ハウステンボス町 2825-7 長崎国際大学 脇野 幸太郎 研究室 TEL0956-20-5514



コロナ禍での社会福祉の学び

学科長 脇野 幸太郎



卒業生みなさま、お元気でお過ごしでしょうか。

私たちと新型コロナウイルスとの付き合いもずいぶん長くなってきました（その意味で、この「新型」という呼称が実態に合わなくなっていると思うのは私だけでしょうか…）。そのような中、それぞれの現場で奮闘されるみなさまには、改めて深く感謝申し上げます。

大学も、一抹の不安を抱えつつも、4月からの授業の大半を対面（教室で行う通常の実施形態）で実施することになりました。この2年間、オンラインを利用して自宅で授業を受講してもらう「遠隔授業」や、現場での実習に代えての「学内実習」など、学生たちはかなり大きな負担を強いられてきました。対面授業の復活は、「もはやこれ以上のこのようなことは続けていられない。感染対策を万全にしつつ、本来の学生生活を取り戻そう」との本学学長の決断によるものです。

一方で、コロナ禍で通常とは異なるさまざまな経験をした学生たちには、それ自体が人生上の大きな学びとなった、という側面もあるようです。新型コロナウイルスという制御困難な要因によって、生活に困難をきたしている人びとが少なからず生じていること（生活困難や貧困は「自己責任」によるものばかりではないこと）、皆が苦しい思いをする中で、お互いの支えあいやつながりのあり方が改めて問い直されていることなど、「社会福祉」の意義やあり方を考えるうえで重要なことがらを、日常生活の体験を通じて实际的に学ぶ機会が少なからずありました。社会福祉を学ぶ学生たちには、この学びや経験を今後の専門性を育む糧にしてもらえればと願っています。

まだまだ苦しい状況が続きますが、常に希望を持ち続けながら、学生たち、そして卒業生みなさまとともに、社会福祉の学びを続けていきたいと思えます。これからも、社会福祉学科へのご指導、ご支援をお願い申し上げますとともに、みなさまのますますのご活躍を心からお祈り申し上げます。

令和4年3月25日

お知らせ

日本社会福祉学会九州地域部会第63回研究大会の開催について

- ◎ 日時：2022年7月10日（日）13:00～17:00
- ◎ 開催方法：Zoomによるオンライン開催（大会参加費：無料）
- ◎ 内容：①基調講演
②シンポジウム
③自由研究発表

＊詳細な内容に関しては、4月中旬に開設予定の大会ホームページにてご確認ください。



研究室レポート：大町いづみ研究室 便り

—多職種で連携していく力を育てる—

令和 3 年 4 月に、社会福祉学部に着任いたしました大町いづみと申します。この 3 月までは、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻で 15 年間、主に、在宅看護学と医学部医学科、歯学部、薬学部、医学部保健学科 3 専攻（看護学、理学療法学、作業療法学）の学生の皆さんへの多職種連携教育、大学院修士課程では公衆衛生看護学を担当させていただいていました。

東京で 4 年間学んだあと、臨床は助産師、看護師として、日赤長崎原爆病院で 15 年間勤務後、保健所で母子保健を担当してきました。その後、臨床で出会った、患者様やご家族の方々からの多くの学びから、もっと多くの支援を必要とする方々へケアを届けるために、後輩育成に携わろうと決心し教育分野に進みました。自分自身も子育てをしながら、看護専門学校 6 年間、介護福祉士養成短大 6 年間と教育分野通算 27 年間の経験を積んできました。勤務しながら、修士課程、博士課程で学び長崎大学大学院医歯薬学総合研究科公衆衛生学分野で博士（医学）を修得しました。

研究テーマは、地域包括ケアシステム構築にむけた「多職種連携」「エンドオブライフケア」「在宅ケア」をテーマに量的研究に取り組んでいましたが、学生のみなさんには、自分自身の興味のあるテーマで、基礎的な研究手法を大切にしながら、統計解析から論文作成までを支援しつつ、新たな発見、新たな知見を導き出す楽しさを学んでいたきたいと思います。

今や、地球規模での環境の変化、少子高齢化は急速に進行しており、わが国だけではないグローバルな視点でのものの見方やしくみづくり、多職種で連携していく力は欠かせません。この 4 月からは、国際大学でも修士課程を担当させていただくことになりました。

学部はもとより、是非、大学院でもっと学びを深めていきたいと考えている卒業生の方々、福祉職、多職種の方々、一緒に学びを深めていきましょう！ どうぞ、よろしくお願いいたします。

（大町いづみ）

研究室レポート：斎藤晋治研究室 便り



こんにちは。令和 3 年 4 月から社会福祉学科に着任しました斎藤晋治と申します。早いもので着任から 1 年を迎えようとしておりますが、遅ればせながら自己紹介をさせていただきます。

私の生まれは広島県呉市という瀬戸内海に面した街です。かつては軍都と呼ばれ、海軍を中心に栄え、戦後は造船業と自衛隊を中心とした坂の多い街です。こう聞くと佐世保市と同じような歴史をたどっていることが分かります。事実、佐世保に着任し、佐世保の街並みを目にしたときに懐かしさを感じました。また前任校は山梨県の富士河口湖町という富士山を目の前にした、山に囲まれた地域から来たこともあり、海を見るということに新鮮さも感じました。

ところで、私の専門領域は精神保健福祉士のキャリアデザインという領域です。精神保健福祉士が成長していく過程で、どのような目標を持ち、どのように専門性を高めていくことが必要かをあれやこれやと考えています。精神保健福祉士をはじめとする対人援助職は、バーン・アウトしやすい職業としてよく挙げられます。私も精神保健福祉士として病院で働いていた時代に多くの精神保

健福祉士が辞めていくのを見てきました。なぜ辞めてしまうだろうかという疑問がこの分野の研究のスタートでした。多くの教員の方々が精神障害者の生活に焦点を当てた研究をされている中、どちらかというとメジャーではない領域かもしれませんが、精神保健福祉士養成においては重要なテーマだと考えています。

大学では精神保健福祉士の養成にかかわる科目を中心に担当しています。精神保健福祉士として、また大学教員としてキャリアを積む中で、精神保健福祉士は自分自身を道具としている職業だと実感しました。料理人が自分の包丁を大切に扱い、磨きをかけるのと同様に、自分自身を磨いていくことが必要です。5 年後の自分像、10 年後の自分像を描きながら、その目標に向けて自分を磨いていく。学びを深め、専門性を高めるとはそういうことなのかもしれません。この大学で新たな出会いを大切にしながら、ともに成長していくことができるよう力を尽くしていきたいと考えています。

最後になりますが、皆さまにはこれから様々な面でお世話になると思いますが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。（斎藤 晋治）



研究室レポート：星野秀治研究室 便り

“Nothing about us without us” —大失業時代に備えて—

昨年度、着任いたしました星野と申します。社会保障法（年金法）、障害学、キャリア構築支援を専門としています。

もともと九州大学法学府で河野正輝先生に師事し、ふたたび熊本学園大学社会福祉学研究科で河野先生に師事して、現在に至ります。二度も博士課程に行くことになった経緯は複雑なのですが、二度目の大学院は本当に多くのことを教えてくれました。

もともと、河野先生は、「権利の複合構造」という視点から社会福祉の領域に法学的にアプローチする先鞭をつけられ、退官後もダイレクト・ペイメントなどの新しい考え方を紹介する先駆的な研究を続けられていました。一方、その頃の熊本学園大学は、花田昌宣先生、堀正嗣先生、東俊裕先生（内閣府障害者制度改革担当室長に転出中）といった錚々たる先生方がおられ、障害学（disability studies）に取り組む機運が充満していました。

当初の河野先生は、東先生と一緒に教科書などを書かれながらも、障害学の知見を直接取り入れ

るという感じではなかったように思います。しかし、福祉事務所長などを歴任されていた福島正剛さんが、ゼミ生として粘り強く障害学の発想を紹介され、熱い議論が繰り返される中で、「障害法」という新しい領域が河野先生によって切り拓かれていきました。“Nothing about us without us”（私たち抜きに私たちのことを決めないで）は、その時に出会った、権利条約をつくり、世界の政策を実際に変えてきた当事者のスローガンです。

障害者運動は、公民権運動、女性解放運動に続く大きな波ですが、「できる」「できない」という問題に関わることから、能力主義や、再分配のあり方（含、年金）など、私的所有の根幹への問いを含んでいます。現在、IT化によって黙々とする類いの仕事が減り、対人スキルの低い人たちをカテゴライズして排除する仕組みの構築が進んでいます。一方では、人間の能力をはるかに凌駕するAIの登場により、多数の人たちが職を失う日が近いとの予測もあります。生産活動や決定への参加から排除されてきた先達の声に学びつつ、新しい時代の分配や社会のあり方を、皆様と考えていけたらと思っております。未熟な点を痛感する毎日ですが、変わらずご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願いいたします。（星野 秀治）

研究室レポート：向晃佑研究室 便り

令和3年9月に社会福祉学科に着任致しました向晃佑と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は福岡県内の大学・大学院にて臨床心理学を専攻し、臨床心理士の資格を取得してからは精神科クリニック等でカウンセラーとして勤務しながら、さまざまな障がいや不適応を抱える方への支援について実践や研究を行ってきました。大学院を出てから2年半は、大阪府内の大学にて障がい学生支援に関わる業務に携わりながら、支援を必要とする学生（要支援学生）の早期発見・早期介入プログラムを実践し、その有効性について研究してきました。この度縁あって生まれ育った九州にて学生支援に関わることができると、大変嬉しく思っています。

私の専門は「臨床心理学」で、特に「こころ」と「からだ」のつながりに関心を持っています。これまでは、スポーツ選手が訴える心理的な問題の一つとしてイップス（Yips）と呼ばれる現象に焦点を当てた研究を行ってきました。イップスは、これまでできていた特定の競技動作が普段通りで

きなくなる状態を指し、元々はゴルフのパッティング時に生じるものとして理解されてきました。競技現場で対応を求められることが多い

ものの、効果的な支援法は示されていない現状があります。私は、主に野球選手が抱える投・打球イップスをイップスに焦点を当て、イップスの長期化要因や臨床動作法を用いた支援について研究しています。

本学においては全学共通科目の「心理学」を担当する教員であると同時に、学生相談室の専任カウンセラーを担っております。新型コロナウイルスの感染拡大によって、これまでの生活様式が一変し、その変化への対応が求められています。そんな状況下だからこそ、より一層、学生一人ひとりが自分らしく充実した学生生活を送るための、さまざまな活動を行っていきたくと考えています。多くの皆様との出会いを楽しみにしております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

（向晃佑）





卒業生の今

コロナ鍋での支援で感じたこと

15期生 諸石 優美

社会福祉法人平戸社会福祉協議会の通所介護平戸事業所に生活相談員兼介護職員として従事しております、諸石優美と申します。

入社して3年目が経ちました。責任や専門的仕事も多く受け持つようになり、日々たくさんの試練と戦いながら仕事をしています。現在、実習指導講習を受講する中で、自身のスキルアップに力を入れています。自己研鑽を行うことで視野が広がり、サービスの質の向上にも繋がります。年数を重ねる毎に、相談員としてのスキルアップの必要性を感じております。

今年に入り、平戸のコロナ感染者が増加し、それにより、今まで以上の感染対策と観察力が求められるようになりました。感染リスクが高いデイサービスで、どのような対策を行い、支援をしていけるのか、試行錯誤している最中です。コロナ鍋になり、ご利用者様の不安かの高まりが顕著に現れるなど、支援にも大きな変化がありました。私たちに「行動を制限されて気持ちが落ち込んでしまう」との思いも話してくださいます。

私は、コロナ鍋での支援を通して、地域のワーカーとしてのあり方について、改めて考えるきっかけとなりました。このような時期だからこそ、ご利用者様やご家族様の小さな変化に気づき、寄り添える支援者になりたいです。そして苦しい環境の中での生きづらさを少しでも軽減していけたらと思います。

(諸石 優美)



寄り添ったサポートができるように頑張っています

17期生 永石 春希

私は2020年度長崎国際大学の社会福祉学科で卒業しました永石春希と申します。

現在伊万里市社会福祉協議会で地域福祉係として日常生活に困りごとを抱えた方の相談支援や赤い羽根共同募金、日本赤十字関係といった各種募金活動を主な業務として働いています。

4月から様々な困りごとを抱える相談者の話を伺ってきました。現在はコロナ鍋の影響で収入が減少し、家賃や光熱費、車の維持費が支払えないといった相談が多いです。思うように生活がいかない相談者の強い言葉遣いに落ち込むことは多いですが、休日に甘いものを食べ楽しむことで気持ちをリセットしています。始めは悲観的だった相談者が話を進めていく中で生活の方向性が見え、他機関に繋がった時に「ありがとうございました」と感謝の気持ちを言われたときには嬉しく感じます。また、相談者だけでなく連携する中で関わる多機関の専門職から仕事を褒められた際も嬉しく感じ、やりがいを感じます。

これからも、日常の中にある様々な利用者さんの思いに寄り添ったサポートができるよう、日々専門職として精進したいと思います。

(永石 春希)



国家試験合格報告

社会福祉学科国家試験合格支援委員会

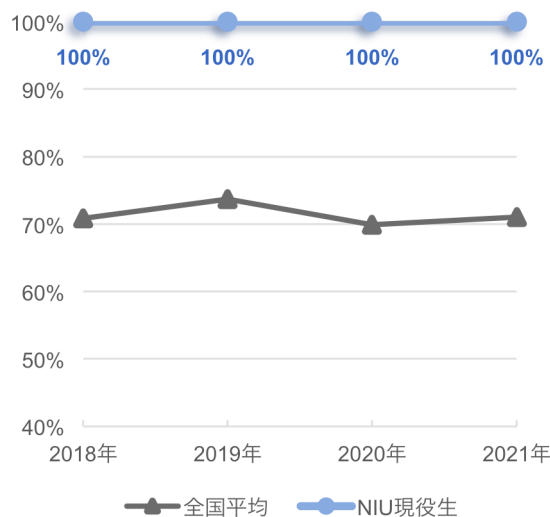
今回は、本学の3福祉士国家試験合格率の推移についてご報告いたします。

毎年最も受験者が多い社会福祉士国家試験は、2018年度から合格支援プログラムを強化したことにより、合格率がワンランク上がりました。介護福祉士国家試験は、学生も国家試験を受験することになった2017年度から4年連続で100%を維持しています。精神保健福祉士国家試験は、大幅な教員の入れ替えがあり、合格率が下がりました。

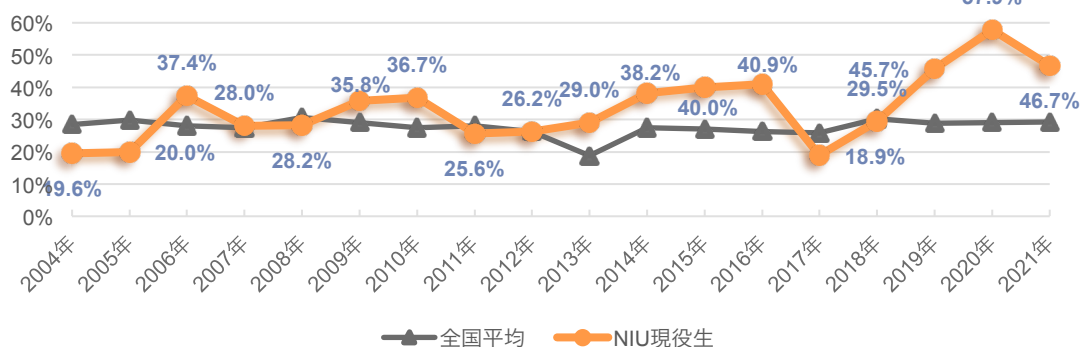
以上から、あたり前のことですが、“専門職養成の質は、教員がどれだけ学生と一緒に高い意識をもって頑張れるか”に掛かっているということを改めて感じました。今後も精一杯努めてまいりますので、どうか皆様、ご支援・ご協力を宜しくお願いいたします。

(国家試験合格支援委員長 野田 健)

介護福祉士 国家試験合格率の推移



社会福祉士 国家試験合格率の推移



精神保健福祉士 国家試験合格率の推移

